

# 特別支援教育研究論文集

—令和4年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

日本語指導が必要な個別支援学級の子どもへの  
指導に関する研究  
—個別支援学級と連携した国際教室の指導等の工夫—

神奈川県横浜市立元街小学校

研究代表 校長 工藤 雅彦  
(国際教室)  
主幹教諭 立上 芳  
教諭 大長 智子  
教諭 佐々木もも  
(個別支援学級)  
教諭 門馬 美奈  
教諭 笹川 恵里  
教諭 福川 陽子  
教諭 久保田 峻

令和5年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

## 要旨

横浜市には、令和4年10月現在、約10万5千人の外国人が居住し、それに伴い外国籍及び外国につながる子どもも年々増加している。その中には日本語指導が必要な子どもがいる。横浜市では、日本語指導が必要な子どもの数に応じて、各校に国際教室を設置し、生活適応指導、日本語指導、教科指導等を行っている。本校では、個別支援学級に在籍している外国籍及び外国につながるのあり、日本語指導が必要な子どもに対して、学校生活や授業を理解する上で必要な日本語を、個別支援学級の教育課程の一部の時間に替えて国際教室で指導をしている。

本研究では、特別な支援を必要とする外国につながる子どもや保護者に対して、本校が行った保育所との連携、入学前からの保護者への支援、そして入学後の国際教室での日本語の指導方法の工夫と改善について実践を通して整理していく。国際教室での日本語指導は、一人ひとりの子どもの実態に応じて指導法を工夫する必要があるが、個別支援学級の子どもへの日本語指導は、これまでの本校のカリキュラムでは適応できないことが明らかになり、個別支援学級担任と子どもの実態を共有しながら、指導法を工夫してきた。例えば、なかなか文字や本に関心を持たなかった子どもに対しては、子どもの興味関心に合った本を用意し、文字を読むことや読書活動が楽しいと思えるような選書の工夫をしてきた。また、読書の後、子どもが読んだ本の冊数を感じ取れるように読書データファイルに蓄積し、達成感を感じられる工夫をした。さらに、ただ本を読むだけでなく読書ビンゴカードを活用し、子どもが読書活動を楽しめる工夫にも取り組んだ。

その他にも、発音に課題が見られた時には、関係諸機関との連携を模索し、常に子どもに寄り添い、適切な指導が行えるよう工夫してきた。また、国語科の読書指導等の実践から、個別支援学級に在籍する外国につながる子どもの国際教室を利用した日本語指導の実践についても研究してきた。

これらの実践から、見えてきた成果としては、個別支援学級に在籍する子どもにとって、国際教室での日本語指導は有効であること、国際教室としては、個別支援学級とともに指導法を検討していくことによって、個別支援学級で行われている支援法を学び、スモールステップでの指導や個別の教育課程にみられるような、個々の発達に合った評価方法の検討をすることができ、個別支援学級での指導法を日本語指導にも応用することができたことが挙げられる。また、今後の課題としては、本研究の中でも様々なアセスメントを実施し、子どもの語彙力を測定しようと試みたが、発達検査によってはそれぞれの母語で実施できないこともあり、発達検査の信頼性と妥当性が十分とは言えない中で、保護者へその子どもに合った教育を選ぶことの重要性を丁寧に説明していくことは今後の課題となった。子どもの実態を正確に把握するための方法を今後も検討していく必要があることが明らかになった。

今後、家族とともに来日し、日本で就労する人々が増加していく中で、日本語の理解が浅い初期指導の子どもの指導が多くなることが予想されるが、日本語指導が必要な全ての子どもへの短期間ではないある程度継続した指導の必要性を感じている。

キーワード：個別支援学級 国際教室 日本語指導 連携 安心